

やり抜く子

「がんばれ～!」「あと少しあと少し!」「ラスト!」
みなさんの大きな声援と温かい拍手がどれだけ子どもたちの後押しになったことか。

もちろん子どもたちは少しでも上位に入れるように走ったとは思いますが、自分で目標を立てて本当にしんどい1km(低学年) 2km(中学年) 3km(高学年)を走り切ることが「たくましくやり抜く子」につながります。そして何よりなかまといっしょに走ることが自分を高めてくれます。ひとりでは腕立て伏せが3回しかできなくても、なかまといっしょに声を出しながらやると10回できちゃう、学校で学ぶことの価値がそこにもあります。

多くの子どもたちが本番に自己ベストタイムを更新したと担任の先生方から嬉しい声が届きました。また「普段作文が1～2ページしか書けない子が4ページも書けたんです」等マラソンに係るいろんな感動のドラマも聞かせていただきました。

保護者のみなさまには、お忙しい中、布小の大特典でもある(小学校で競技場スタートゴールのマラソン大会はほとんど聞いたことはありません)布引グリーンスタジアムでご参観いただき、自分の子だけでなく、すべての子どもたちにもたくさんのご声援をありがとうございました。また、当日までのマラソンカードのチェックや健康管理、そして日々の激励の声かけなどのサポートに心より感謝いたします。



体験から学ぶ ～何ができるようになるか～

新学習指導要領が次年度から小学校で全面実施となります。10年に一度改訂される今度の学習指導要領は「何ができるようになるか」が大きな改訂の方向です。いくら勉強ができてても社会に出てやりがいのある仕事や充実した家庭生活ができないと知識の価値は薄れます。

つい最近、大学入試制度の民間試験導入で文部科学大臣が「身の丈」発言をしたことが話題になり、次年度導入は見送られましたが、英語教育も大きく変わります。それは「読む・書く」の受験中心の教育内容から「聞く・話す」を加えたより実践的な英語教育への転換です。我々大人は中学3年間(高校・大学等)外国語を習って、いったいどれだけの人が英語が使えるのでしょうか。外国人とどれだけ意思疎通ができるのでしょうか。字幕無しの洋画をどれだけの人が鑑賞できるのでしょうか。

そう考えると英語教育の改訂の方向は間違っていないと感じます。外国語を習って「何ができるようになるか」それが学ぶためのゴールです。

裏面に校外学習の学ぶ子どもたちの様子が紹介されています。本校では、「学校で学び、外に出て体験し、また学校にもどって学ぶ」というサイクルを大切にしています。仕事の手法と全く同じです。「商品を作り、世に出して売り、売り上げを分析してまた再開発する」というこの行程を個人あるいは学級で作りながら、社会に出て役に立つ学習を大切にしていきます。



工事現場で重機の運転体験